戦争体験

●阿佐谷南二丁目
尾形　義三郎
（大正七年生まれ）

昭和一三年徴集。昭和一四年一月一〇日現役兵として、歩兵第一五連隊補充隊第七中隊に入営。補充隊にありて、日中戦争国内戦務に加算入営。一週間までは平穏で、一週間過ぎると最悪の生活で血も涙もない上官と古兵ばかりです。二、三例を挙げると、煙草を吸いたくとも吸えないので、便所に行って吸う。その時八中隊の軍曹が通った時に便所の中で煙が上っている。それを見て七中隊に来て「お前の所の便所の左から三番目の所から煙が出ているぞ」とわざわざ言いに来た。それを聞いた班付の上等兵が「今便所に行った者は全員集まれ」と言って、四、五人集まると「今便所に行って左から三番目を使った者は前にでろ」と言う。Nが前に出ると「お前煙草吸いたいか」「吸いたいであります」「そうか今持っているのを出せ」まだ一七、八本ある。「火を付けてやるから吸え」と次から次へと終わるまで吸わせて反吐（へど）はくまで吸わせ、「貴様吸いたいと言ってながら、そのざまはなんだ」と言い、革のスリッパで顔を力一杯四、五〇回なぐり、口からも鼻からも血が吹出し、目は見る見るふくれ上り、目が開かなくなるまでたたきました。

次にもう一つ。訓練が終わって五時ごろ兵舎に帰る。下士官、上等兵の脚絆（きゃはん）や靴をぬがせてやり室内に入ると、もう古兵が飯をもり付けて下さっている。夕食を済まして洗い場で食器を洗い、桶は炊事場に持って行きます。それが済むと兵器の手入れ。その後軍隊内務令や歩兵操典、陸海軍人に賜った勅諭を暗記する。出来ないと毎日ビンタです。消灯近くなるとこんどは整とん棚の検査で、少し曲がっていると木銃でばらばらにされ、次に編上靴の検査で、金ビョウがいっぱい打ってある底に土が少しでも付いていたら大変です。「貴様これでも手入れしたのか」と、「なめろ」と力まかせた口にたたき付ける。前歯がかけた人、唇が切れて血の流れる人。次に靴下の検査で、少しでも黄ばんでいると大変。次に食器袋と検査が終わると、「靴に土の付いている者は紐をむすんで首に掛けろ、食器袋を頭にかぶれ、靴下は口にくわえろ、これから両手をついて歩き、四こ班各班に見てもらって来い」といわれ、「第一班誰々参りました。見てもらいたくあります」と

四班廻るのです。「おお見てやるぞ」と言って「貴様よくもこんな汚い物を見せに来たな」と言ってなぐるける。帰って来ると鼻血やこぶで顔はあざだらけです。帰って来てから班付上等兵は「貴様よくも恥さらしをして来たな」と言ってごつごつやられる。まだ三〇枚以上書いても書ききれません。

戦争程恐しいものはない。戦争ほど残酷なものはない。戦争程悲惨なものはない。国のためと言うが、昭和一四年四月二六日歩兵第一五連隊補充隊要員として神戸港出発、九日目に塘沽港に上陸、歩兵第一五連隊九中隊に編入。それから三日間汽車に乗りっぱなし。徐州、済南、蘭封、開封に到着。蘭封を通過する時死人がごろごろしてて、野犬に荒されており恐ろしい戦争の傷跡でした。開封に着いた時は夕方でした。時々銃声が聞こえて来る。私たちの近くでした。その時犬が土塀を飛越えて来たので、咄嗟に兵が撃止めた。上官が「それだけ元気が有れば大丈夫だ」と言って元気付けました。翌日ソー屯に着き、農家の大きな家に分散して兵が入り、家主は物置に入り、母屋は私たちが入り、実戦訓練を半年位やり最前線に行き、毎日毎日討伐、討伐です。連隊は、大隊毎に、大隊は中隊又は小隊毎に、駐屯して毎日連絡を取り合って、また密偵を使っては戦闘です。また、友軍から無線で敵に包囲された時には、雨が降ろうが嵐になろうが、ただちに出発。大洪水で肩や首まで漬かっての行軍。二、三日も歩いて戦闘、敵は夜中でも撃って来る。敵に会い、撃ち合いが始まるとも う大変、弾に当たってうめき声はする、機関銃の耳をつんざく音のすさまじさ、もうなにもわからない、敵をたおすのみ。二、三時間後には敵は散り散りばらばら。着いた所の部落で食事。米以外は全部徴発して食事、鳥やねぎ、味噌、醤油全部です。そして戦死した人を戦場に葬って帰る途中にスイカ畑の所を通った時は、まだできていないので農民が割って見せ、まだだめだだめだと言っているのに、皆剣で次々に割って少し赤味のあるのを食うのです。帰りにはもうへとへとで、何人かは歩くのに大変で、その時農夫を呼ぶのですが来ません。銃で撃つまねをするとしぶしぶ来る。その人に背袋や雑袋を背負わせて留守部隊に来るのです。本当に可哀そうでした。

戦闘出発の前日は遺書と頭髪、爪を切って封筒に入れて行くのです。M衛生兵は肺に弾が入り、そのままで、傷口がふさがるまで野戦病院に行かれなかった。H軍曹は恋人からの便箋八枚を胸ポケットに入れていったので、その手紙で止まっておりました。除隊しても彼女以外の人とは結婚しないと言っておりました。T上等兵は防毒マスクの袋の中にドロップの缶を入れて弾をよけ、命が救われました。

中国軍が飛行機でビラを散らし部隊長が「拾うな、読むな」とさけんでも皆陰で読みました。「日本の皆様」ではじまるビラの内容は今でも覚えています。

奪われた青春

●久我山二丁目
小熊　重雄
（大正七年生まれ）

日本の三大義務と徴兵検査

私も二〇歳になり、徴兵検査を受ける日が来た。正規の名称は何というのか忘れたが、二〇歳で内検査、翌年の五月中旬に今一回受けることになっていた。そのころの若者の気質では、徴兵検査に甲種合格することが、最大の名誉と本心からそう信じていたのである。男の子なら兵隊さん、女の子なら看護婦さんと、南は台湾、北は樺太まで一億総国民が皆そう思いこんでいたのである。軍人の株が上がり、軍人万能の時代であったから、若者がその気になるのも無理もない。一方、私たちも兵役の義務を果たせば、一人前の男子として世間からも認められたのである。若者は平素から仕事に励み、節約して当日着用する衣服は、自分で作る風習があった。日本の三大義務である兵役は、身体強健な者はもちろん身体に傷害のある者でも、一応検査を受けなければならない事になっていた。

さて晴れの検査当日、私は生まれて初めて背広を着用した。検査場では身長、体重、眼科の順で実施され、最後の眼科の検査が終わると次はふんどしまで取り、生まれたままの丸裸になり、検査官の前に立つといきなり男の急所を掴み力一ぱい二、三回しごかれ、危く声を出しそうになった。次はお尻の検査、これで全てが終わり私はもちろん異常なし、ただ身長が気になった。その時は兵隊になりたい一心から本当にそう思った。急所は性病の有無、お尻は分からないが、入隊してから支障があるのだろう。当日指摘された者は来年の検査までに全治させておかねばならない。

念願の甲種合格

翌昭和一二年五月本検査当日私は、定刻より幾分早目に検査場へ到着した。簡単な筆記試験の後でまた身体検査、この検査でどこにも異常がなければ合格である。しかし検査官は何とも言わない。果たして凶か吉か。私は急ぎ服装を整えて最後の検査官でこの日の最高責任者でもある徴兵執行官の前に進み出て、不動の姿勢をとった。ピンと髭をたくわえ、生まれてから一度も笑ったこともないような執行官に向かい丁

寧に敬礼してから、小熊重雄と一世一代の大声を張り上げた。下を向き書類を見ていた執行官は、私の方を向きおもむろに口を開き、甲種合格お目出とう、これからは身体に注意して来年は必ず入営できるように、と激励された。

私が二一歳の五月某日のことであった。天皇陛下のため、御国のためと心からそう信じ、甲種合格になったことは、家門の名誉と胸を張って生家の敷居を跨ぎ、私の合否を心配して待っていた母に報告した。そのころ兄嫁は病気で寝こんでいたが、私の甲種合格を心から喜んでくれた。男は兵隊になれなければ一人前ではない、と言われたころであるから当然であった。

兄の召集令状

働き者の兄嫁も昭和一二年八月一二日幼い子供三人を残して三三歳の若さで死亡した。その二か月後に兄に最初の召集令状が届いた。その時の兄の気持ちはどんなであったろうか。

老母と幼い子供三人を残して御国のためとは言え、応召せずに済むものなら済ませてやりたいが、当時の国民感情が許さなかった。そうした逆境にもめげず、兄は何一つ不平がましいことは言わず応召した。その時、兄の長男（甥）は七歳、二女（姪）は四歳、三女（姪）は〇歳七か月、母は六九歳であった。村人の万歳の声に送られ、兄の乗った電車が走り出し次第に遠くなる兄、これが今生の別れかと思うと、しらずしらずのうちに目頭が熱くなる。生家では、商売等経験がないのに兄のかわりに続けなければならない次兄。残る二兄も辛いが、老母と幼い子供を残して出て行く兄は、もっと辛かったろう。さらば日本大阪港出発。

続いて私が満州へ

昭和一四年に、大阪の南波別院に集合した私たちは、一晩旅館に泊まり、翌日小雨の中をやっと大阪港に着いた。一行は小休止する暇もなく、直ちに乗船開始。輸送指揮官が全員の乗船を確認すると、船は錨を上げ小雨降る大阪港の岸壁を静かに離れた。マストには大日章旗が揚がり、続いて軍楽隊が荘重なる君が代を吹奏するや、きせずして見送り人の大群集の中から嵐のような万歳の声。『銃後のことは心配せずにしっかり闘って下さい』と愛国婦人会、国防婦人会、その他各種団体等大阪市民の方々が声を限りに見送りしてくれた。その声と旗の波。まさに男子の本懐である。私たちは、上甲板に整列し最前列の輸送指揮官が一同を代表して挙手の礼をされた。ボーボー、船も汽笛を鳴らし、見送りの人たちに応えながら沖へ沖へと進む。私たちは、群集の姿が見えなくなるまで甲板に立ち、別れを惜しんだ。ふと気がつくと、誰の頬にも涙が流れていた。

昭和一四年ごろは今考えると戦況は我々に不利で、敗戦のきざしは上層部ではすでに分かっていたのだろうが、二〇代の私たちには関係なく、船は貨物船で馬と一緒に輸送されて行ったのである。

ラバウル第一線主計として

●成田東四丁目
奥村　勉
（大正五年生まれ）

私は昭和一七年二月一日学徒出陣繰り上り卒業第一号として、歩兵第六八連隊（岐阜）へ第一補充兵として召集を受け入隊した。その後、経理部幹部候補生として名古屋中部二部隊で集合教育を受け、東京経理学校甲種幹部候補生隊に入隊、昭和一八年一月二五日卒業と同時に南東第八方面軍司令部附経理部見習士官を命ぜられた。

制海権が怪しくなり四一名が一つの船では危険視されてか、私は第二梯団二一名に加わり、二月六日新造船三池丸（一万三〇〇〇トン）で宇品を出港独航し、パラオで降ろされ、船待ち三週間後六隻の船団が組まれ、三月二〇日夕方ラバウルに入港した。上陸出来ぬその夜米機の来襲で我軍照明灯の交叉と陣地高射砲の炸裂、曳光弾（えいこうだん）の飛び交う光景は「両国の花火」とは異なり、凄絶な眺めであった。

翌日ラバウル上陸、I方面軍司令官に申告、第三八師団（名古屋）経理部附を命ぜられた。師団司令部はラバウル東南六〇キロのガバンガにあり、海岸沿いの椰子（やし）林にテント住い、師団長以下ガダルカナルから撤退したばかりで労苦を癒しているところであった。

五月一日熱帯潰瘍を患うガ島帰りのF少尉の交代として、歩兵二三〇連隊（静岡）第一大隊附主計を命ぜられた。司令部から南八キロのロンデップへ赴任した。大隊とは名ばかりで、人員は本部が隊長、副官、軍医、情報将校を入れても十数名、一個中隊が二〇名、機関銃中隊を加えても総員一〇〇名で、ガ島生残りの見習士官や曹長が中隊長になっていた。一様に蒼黒い顔色で冴えず、飯盒を腰に杖をついてとぼとぼと無気力に歩いている。これが皇軍の姿かと眼を覆う程で、マラリヤ熱と肝炎で膨れ、手足は熱帯潰瘍で悪臭を放ち、全身が皮膚病であった。しかし寡兵の大隊も、ニューギニアに渡れぬ残留隊、マニラ病院からの退院兵、内地からの初年兵や召集兵が加わって、恰好はついて来た。

マッカーサ元帥はガ島からニュージョージヤ島ムンダに集中して来た。ムンダには二二九連隊（岐阜）がいたが、陥落した。九月に入ると、ロンデップへも夜間魚雷艇が出没、偵察上陸を行って来た。寡兵の我々はタコ壺を掘り対戦車濠造

りを急いだが、十字鍬でリーフをくり抜く作業は捗らなかった。

一一月一日我が第一大隊は、ムンダからボーゲンビル島へ進出した米軍に備え、海軍警備隊だけの手薄なブカ島飛行場守備のため、応急出動を命ぜられた。新配属の速射砲隊を加え八〇〇名に膨張した経理室の業務は多忙を極めたが、当大隊を乗せる駆逐艦七隻が僅か二隻しか集まらぬ事から、一月五日応急出動が解除される事となった。

空襲の最盛期はこの前後が最も熾烈で、彼我の戦闘は最高潮に達し、米軍は日に三回、一〇〇機から二〇〇機のボーイングB25、コンソリデーテッドを主力に来襲した。彼らは三式弾を受けバラバラに解体して落下する。こちらは大井、天竜級の軽巡が岸から五〇〇メートルの処で直撃を喰い、真二つに裂けて見る間に沈んでしまった。

昭和一九年二月一七日、ニミッツ機動部隊がトラック島を奇襲した。我がラバウル航空隊は応援に三〇〇機が飛び立ち、トラックで交戦したが、滞空時間切れで着陸、爆破され、この日以降日本の編隊は影を失い、特攻用数機しか残されていなかった。

応急出動解除の我が大隊は、食糧が底をついてしまい、芋作りは野鼠に荒され、芋虫で全滅する。南瓜、パパイヤ、椰子の実、蟹、もぐら、錦蛇、蜥蜴、蝙蝠、鸚鵡、蝸牛等、手当たり次第口に入れるガ島以来の食糧難に困窮した。

昭和二〇年八月一七日K第三八師団長の終戦詔勅伝達を受けた。二〇日附で中尉に任ぜられた私には、新規の仕事が待っていた。

九月二一日特設陸上勤務第六中隊へ派遣され、荷役、農耕に使用していたインド兵四三〇名、インドネシア兵二六〇名を彼等の本国に送還する業務完了まで従事した。風俗、慣習、食事の異なる民族とてヒューマンリレーションは円滑にいかず、「特六勤」から戦犯容疑者五名が拘引された事は残念であった。

終戦直前、沖縄も陥ちたある日、コックリさんで定評のある隣接の軍直戦車隊の軍曹を宿舎に呼んだ。課題は「戦争はいつ終わるか」「内地に地震があったそうだが名古屋は無事か」の二つであった。下士官は上半身裸になり、鉢巻して内地の方向に向かい、京都伏見稲荷神社を拝んでいた。

「今夜は大丈夫。神様が来られるようです。準備しましょう」と言う。

天狗、狐、狸と書いた紙片を三本の篠竹に丸め、御供物に鮭缶の残りを組んだ竹の上に載せ「いろは四八文字」を書いた大きな紙を拡げた。助手に二人の兵を選び、下士官と車座になり皿のふちに人差指を置く、厳粛な祈禱が始まった。一時間経ち二時間経ち三時間にもなろうころ、俄かに皿があたりの静寂を破ってカタカタ動き出した。面白半分の助手も、今は額に汗を出して半死半生、虚脱の状態に陥っている。

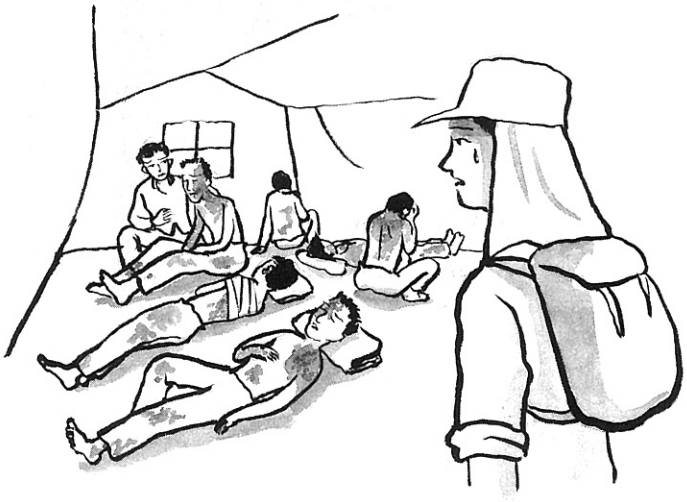
「途中雷雨があって遅れました。ただ今から始まります」と言い、居並ぶ兵は緊張して「いろは」文字に躍る竹の足跡

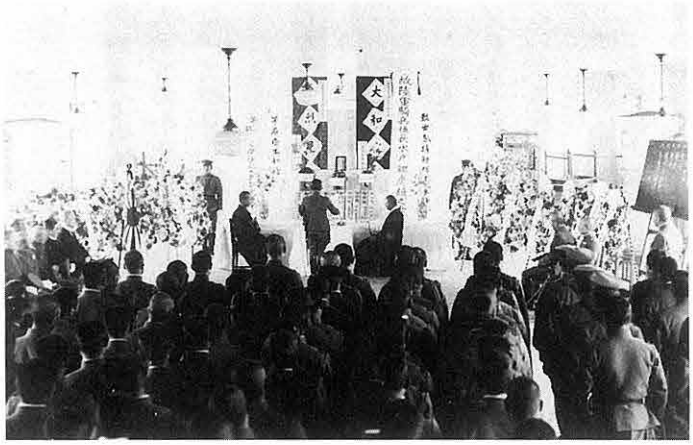
を記帳した。

「戦争は近い内に――、終わる」「その時期は八月初め――」

「地震は―名古屋―心配なし―」「近い内に富士山が爆発し―沈む―」

これまで紙面を躍っていた三本の竹の足はハタと止み、コックリ軍曹は油汗にまみれ放心状態であった。私は催眠術だなと思いながらも、翌昭和二一年四月二七日乗船の日を迎え、旧三等駆逐艦初桜で浦賀港へ復員した。





アルバム「満州駐箚記念」より

〈提供　菊池正芳さん〉

戦争体験記

●下高井戸三丁目
小越　菊義
（昭和三年生まれ）

私の郷里は四国山脈の西麓、どちらを向いても山ばかりの、人口は現在二、〇〇〇人余りの小さな寒村であります。私はそこで生まれ育ちました。父が早く亡くなり、家が貧乏で中学（現在の高校）に行くこともできず、小学校を卒業すると直ぐに村役場の用務員になりました。日給八五銭でした。

昭和一七年の春、私も満一四歳となり、軍隊に志願できる年齢に達しました。私は次男でしたので当然のように陸軍航空兵を志願しました。父が軍人でしたので、私も小さい時から職業軍人になるように教育され、「天皇陛下に忠義を尽くせ」という意味で菊義という名前も父がつけたと聞いております。

願書を提出しましたら、兵事係を兼務されていた役場のU助役さんが「お前は海軍の飛行機乗りになれ。村から陸軍の航空兵は既に何人か出ているが、海軍の飛行兵は未だ一人も出ていない。それに今からの戦争は、陸軍よりも海軍の方が重要なのだから」と言われました。しかし私は海軍のセーラー服が女学生のようで嫌でたまりませんでした（当時は予科練が七ツ釦（ボタン）の服を着るということは知らなかった）。私は仕方無く陸軍と海軍の両方を受験しました。そして、どちらも合格しました。私は「陸軍から採用通知が来たら、海軍へは行きませんよ」と助役さんに告げておりました。ところが海軍からの採用通知は来たのに、陸軍からはいつまで待っても通知はありませんでした。既にU助役さんは故人となっておられるので確かめようも有りませんが、私は今でも助役さんが陸軍からの通知を握りつぶしてしまわれたものと思っております。同時に感謝もしております。もし陸軍の方へ入っていたら恐らく一〇〇％戦死していたに違いありません。お陰でセーラー服ではなく「七ツ釦」の軍服を着けて、夏の休暇で帰省し、素晴らしい姿を郷里の人たちに見せることもできましたし、教育期間中に終戦となりましたので、戦死することもなく現在が有るわけです。

村では当時出征兵士を送り出す時は、部落の人たちが神社に集まって「武運長久」の祈願祭をする習慣になっていました。それを「組祈禱」と言います。出発する前の晩、母が「お

前は明日の組祈禱で、どがいな挨拶をするのぞ。カッカにも聞かせてくれ」と言いましたが、私はテレくさくて「大丈夫、立派にやるけん」とだけ言って誤魔化しておきました。私は先輩から挨拶のやり方を教わってメモしておりましたので、スラスラ言える自信はありました。

いよいよその当日、T区長さんの司会で私が挨拶をすることになりました。私は青年学校の制服姿で皆の前に立ちました。

「本日は御多忙中のところ、私のためにかくも盛大な組祈禱を挙行していただき感謝のほかありません。私は一二月一日付をもって鹿児島海軍航空隊に入隊することとなりました。入隊致しましたならば粉骨砕身軍務に精励して立派な軍人になる覚悟であります。私が出発しました後には年老いた母が一人残りますが、どうか…。」とその時、後ろの方に子供をおぶって立っていた御婦人が両手で顔を覆い「ワッ」と声をあげて泣きだしました。私も涙の出そうになるのを一生懸命に堪(こら)えて挨拶していたので、途端にクックッと胸に突き上げて来るものがあり、声が喉につまって出なくなってしまいました。直ぐに区長さんが私の肩に手を置いて「もういい。もういい」と言ってくれました。そして、広島の鉄道教習所に入所中の兄が帰省して列席していて、旨く私の中途半端な挨拶を簡単に締め括ってくれました。

その御婦人は、村の唯一の交通機関であった省営バス（国鉄バス）のF運転手の奥さんで、妙に今でも瞼に焼き付いたように記憶に残っております。当時未だ幼な顔だった私をいじらしく思われて、あのように泣かれたものに違いありません。しかし、私は入隊後もいつもそのことが、意気地無しのように思われ、後悔されてなりませんでした。だが今になって当時を回顧してみると、誰でもがそうだったからかも知れませんが、涙も見せずに我が子を送り出した親も偉かったし、一四歳位の年齢で、決死の覚悟で軍隊を志願して行った子供も強かったものだと懐かしく思い出しております。そして戦死して逝った同僚、先輩の御冥福を祈りながら、老妻と共に四国八八か所の霊場めぐりをしている今日このごろです。

支那事変記念写真帳
〈提供　本橋仁さん〉